

『室町時代の一皇族の生涯「看聞日記」の世界』

横井清著／講談社

前回、「中世の秋」を紹介したので、今回は日本のものということで、余り知られていないかもしれない（だから選んだ）が、関連するものとして取り上げてみた。

「看聞日記」は、室町時代前期の一皇族の応永23年（1416）から文安5年（1448）まで、足利義満没後、將軍義持から義政就任後幾ばくかの間、30有余年に及ぶ日記である。原本「看聞日記」の著者、伏見宮貞成親王は、南北朝統一後の北朝側の皇族で、崇光天皇の孫、後花園天皇の父である。京都近郊の伏見の里で過ごした日々の記述が淡々と続く。饒舌にして波乱と珍奇に富む、と著者は紹介している。

原本の日記（続群書類従 捕逸にある）の存在は半世紀近くも前に知っていたのだが、漢文で書かれており、当然のことだが、あまり興味もわかぬ行事の記録も多く、原本を読む気にもなれず、誰かが書いた紹介本が出るのを期待していたところ、暫く気付かなかったが、ある日ふと目にとまり手にしてみた。

以前、本学におられた杉山先生が、中東で従事した当時の経験から、考古学者なんて墓掘りですよ、と自嘲しておられた。シュリーマンがトルコやギリシャで発掘していたころは、宝飾品目当てであったろう。盗掘の盗人と大差なかったかもしれない。が、近頃は、ゴミ捨て場と便所が考古学の対象と聞く。DNA鑑定が発達したからだ。養老孟司さんも古い人骨には違和感はないのかもしれない。対象が地味になったのだ。だから、派手な活劇がなくても良いだろうとの魂胆である。

ドナルド・キーン氏がこれも大分前、朝日新聞に、日本人の日記の紹介を連載したことがあったので、その中に含まれているかもしれないと思って、調べてみたのだが含まれてはいない。序文で貴族の漢文の日記が余り取り上げられていないと本人も認めており、明月記を取り上げたところで、こぼしていた。漢文ではあるし、注釈書もない。史学者はそれで十分だろうが、素人は読みにくい、と。あまり興味もわかぬ事実の記録などは端折ってくれたらよい、と述べている。氏

は文学者なので、個人感情が吐露されたところに、時を越えて共感できるところを探っているが、史学者は、無味乾燥な、とキーン氏が称する当時の慣習を読み取るために用いる。

同じようなものに藤原定家の明月記がある。良く知られた「世上乱逆追討耳に満つと雖も之を注さず、紅旗征戎吾が事にあらず」の記述を、私も昔初めてこの部分を目にしたとき、キーン氏と同じ過ちをした。これも漢文でキーン氏ならずとも読み通すにはつらい。堀田善衛氏が「明月記私抄 正統」（ちくま学芸文庫）を書いている。文学に興味ある方にはこちらの方が有名だろう。だから、目立たぬ方を紹介してみた。ドナルド・キーン氏の連載は「百代の過客」（朝日選書259、講談社学術文庫）として残る。こちらのタイトルは、氏が取り上げた日記、紀行文の中でも芭蕉の「奥の細道」の書き出し、「月日は百代の過客にして、」から取ったもので、更にこれは李白の「夫、天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮世夢如、為歎幾何、」からの引用であったことを思い出した。（私がこの語に接したのは年代順であった）プルースト著「失われた時を求めて」の「紅茶に浸したマドレーヌ・・・」、というふうに興味をそそられたら、お手にされては如何か、という次第。

人は時には、騒がしい現代の日常を離れて、旅をしたいと思うことがあるに違いない。身体を移動せずに、実行しようというとき、書物が役に立つ。見知らぬ風景に、目を見張ることはないのだが、違和感こそ道のつれづれ、毒にも薬にもならないが気分転換にはなる。

「看聞日記」の世界は、著者により、良く読み続けられるものに仕立て直されている、と感心したことを覚えている。何か役に立つのか？と言われても、多分役には立たない。何が面白いのか、と問われても小説や物語ではないので、これも人による、と答えるしかない。「異界の旅」を辿る気がしたら、紐解いて見るのも一興。振り返ってみて、この本に登場する人物たちは、我々と隔絶しているのか？

ソフォクレス「オイディプス」では、意識されてなかったことがあらわになっ

たとき悲劇が生じ、シェイクスピア「マクベス」でも予期せぬうちに悲惨な状況に追い込まれていくではないか。我々もいつか舞台上に立たされてしまうかもしれない。ひょっとすると解死人を演じる羽目に陥らないとも限らない。時立てば、後に我々も奇怪な風習に染まった怪物と見なされるだろう、と想像をたくましくするところに読書は成立すると。

執筆者紹介

高橋 秀雄

教育開発系准教授。専門領域は、数学。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『室町時代の一皇族の生涯：『看聞日記』の世界』横井清著 講談社（講談社学術文庫） 2002年 1,470円

『定家明月記私抄』堀田善衛著 筑摩書房（ちくま学芸文庫） 1996年 945円

『定家明月記私抄 続篇』堀田善衛著 筑摩書房（ちくま学芸文庫） 1996年 1,155円

『百代の過客：日記にみる日本人』ドナルド・キーン著 金関寿夫訳 講談社（講談社学術文庫） 2011年 1,785円

ブックガイド目次へ